

新しい時代を告げる 鶏に期待して

大森山動物園長

小松 守



こえ よし どり
声 良 鶏

西年にニワトリが登場するのは、『酉』（音読み「ユウ」）の訓読みが「とり」であるため、動物神の『鶏』が当てられたようで、酉と鶏とは意味の上で関係はない。中国語学者の藤堂明保氏は『酉』の字はその著書「漢字文化の世界」の中で酒をしぼるツボの象形であり、収穫した穀物で新酒を作る時（季節）などを意味しているとしている。酒を入れる壺としての『酉』の字に惹かれるものもあるが、ここは動物園、動物としての『鶏』についてふれたい。

どんな家畜にも原種となる野生動物が存在するが、鶏は今から約4～5000年以上も前に東南アジアに分布する赤色野鶏せきしよくやけいが家畜化（ニワトリ化）されたものだとされている。最古の家畜といわれる羊は西アジアで1万年程前、既に人間に飼われていたが、東南アジアの鶏も負けないくらい古いことになる。人は鶏をおいしい肉を与えてくれる扱いやすい動物としてだけでなく、他の家畜にはない卵を産むことに大きな

魅力を感じたのであろう。赤色野鶏の卵は30g程度と小さかったようだが、改良された鶏は60g以上もの卵をたくさん産むようになった。

しかし、人は鶏にタンパク源だけでなく、鳴き声で時を告げてくれるという他の家畜にはない特徴も見逃さなかった。鶏の鳴き声にちなんだ話を少しご紹介したい。

中国に『鶏鳴の助』という言葉があるが、これは新妻が夫に対し鶏が鳴いたので起きなさいと励まし仕事に送り出すことから、君主が賢夫人の内助を得ることをいう意味で使われる。これに関連し、昔、中国では宮廷勤務は鶏が鳴く夜明け前に出勤したようだが、朝廷という言葉はそこから来たとのこと。鶏の鳴く暁前に起き仕事に入り、暗くなる日没には夜遊びをせず家路についたのであろう。自然でいかにも健康的な生活に思える。

鶏が時をつくることで有名な話は日本書紀の中にもある。天の岩戸にお入りになった天照大神あまてらすおおかみ（太陽神）を引き出すのに神々は常世の長鳴き鳥とこよを集め鳴かせた。その声を聞いた天照大神は暁（朝）であることを知り、岩戸を開け、天地に再び太陽の光が行き渡ったと記されている。長鳴き鳥がどのように鳴いたかは定かではないが、大森山にいる長鳴き鳥の天然記念物・声良鶏こえよしどりは低いドスの利いた声で長く鳴くので、静まりかえった夜明けには遠くまで響くかもしれない。

鶏の鳴き声は、わが国では一般にコケッコウと表すが、韓国ではコッキョウ、英語ではコカドゥードゥルドゥー、フランス語ではココリ、イタリア語ではかわいらしくクックルクー、スペイン語ではキキリキーなど、鶏の品種が違うのか、聞く人の耳が違うのか民族によって異なっているのは実に面白い。

目覚まし時計が発達した今は鶏に時を告げてもらう必要はなくなったし、その声は現代社会にあっては騒音となり、鶏が町中で飼われることがほとんどなくなった。朝、機械に起こされるのではなく、鶏（鳥）の声とお日様の明るさで自然に目覚める生活こそ、人間らしいのかもしれない。

昨年は鳥インフルエンザ発生で明け、夏は猛暑、秋には台風の異常発生と大地震、さらには暮れ海外で起きた未曾有の大津波などなど、最後の最後まで「災」の多い年であった。「災」の年は早く去り（サル）、鶏さんたちに真に明るい夜明けになってもらえるように新しい時（年）を告げてもらいたいものである。

背景（題字） 須田 志美男